来ましたっ！パワパフガールズ７！！

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
来ましたっ！パワパフガールズ７！！

【Ｎコード】
Ｎ４５０４Ｃ

【作者名】
ユーリ

【あらすじ】
アニメにもなった『出ましたっ！パワパフガールズＺ』のその後のお話。新たな仲間４人と共に、美少女３人娘が東京ＣＩＴＹの平和を守るために立ち上がる！！

第０１話：運命の出会い！２人の少女は敵か？味方か！？（前書き）

ここは東京（とうきょうシティー）ＣＩＴＹ。
平和だったこの街に突然モンスター達が現れるようになったのは、ちょうど１年前のこと。
そして、モンスター達から市民を守る美少女３人組が東京ＣＩＴＹに現れ、東京ＣＩＴＹの平和を保っていた。
彼女達の名前はそれぞれ、ハイパー・ブロッサムこと赤堤ももこ、ローリング・バブルスこと豪徳寺みやこ、パワード・バターカップこと松原かおるといった。
３人は、戦う愛のサイエンス・レジェンド『パワパフガールズＺ』と名乗り、モンスター達から東京ＣＩＴＹを守るために日々戦ったのだ。
そしてついこの間、ようやく『カレ』というモンスターを倒し、一時的には平和が戻ったかに見えていた。
しかし、モンスター達の襲撃は一向に止まず、彼女達は再び戦う日々を強いられていた。
そして、１年の歳月が過ぎたこの日、運命の出会いが３人を待っていたのであった・・・

第０１話：運命の出会い！２人の少女は敵か？味方か！？

今日も科学研究所で、ユートニム博士と北沢ケンの声が響く。
「今日もモンスターが出現したか！場所はどこだ？」
「ＣＩＴＹパークのド真ん中です！」
『パワパフＺ、出動だワン！』
「はいよー！」
元気良く叫んだこの少女は、ハイパー・ブロッサムこと赤堤（あかづつみ）ももこ。
甘い物に目がない、パワパフＺの自称リーダーである。
「ラブリーお洋服がまた着れますわ～！」
お嬢様口調で話すこの少女は、ローリング・バブルスこと豪徳寺（ごうとくじ）みやこ。
男の子にモテモテの天然お嬢様である。
ちなみにパワパフＺのコスチュームを一番気に入っているのも彼女だ。
「さすがに慣れたけどよ・・・やっぱりオレはスカートは気に入らねぇな。」
男口調で話すこの少女は、パワード・バターカップこと松原（まつばら）かおる。
男勝りな女の子であり、３人の中で唯一スカートを嫌う子である。
「またまた～、かおるはそんな事言っちゃって～！本当は気に入ってるクセに～！」
「気に入ってねぇよ！！」
ももことかおるは言い合いを始めた。
「ケンカはいけませんわよ～。」
それを止めるみやこ。
彼女の声が棒読みだ。
「あの～。早く出動してくれませんか？」
ケンが３人を即した。
「はいは～い、行ってきま～す！」

「がんばりますわ～！」
「ったくよ・・・」
『ん？これは・・・』
「あ、ちょっと待って！」
ケンが叫んだ時には、３人は既に飛び出して行った後であった。

「着いた～！」
「んで？モンスターはどこなんだよ？」
「おかしいですわね。この辺のハズなのに・・・」
そう言うバブルスの目が、ある方向に向けられた。
「あ！あそこですわ！」
そう言うバブルスが指さした場所には、既にモンスターが気絶した姿で倒れていた。
「どういう事だ？オレ達まだ何もやってねぇんだぞ！？」
「って事は、誰かが先にモンスターと戦ったって事・・・？」
「そうですわよ！」
「！？」
振り向いた3人の目の前には、見知らぬ少女が2人立っていた・・・

第０２話：最強コンビ出現！その名はフルーティアとグラフィティア！！（前書

キャラクター紹介１

赤堤桃子（あかづつみももこ）
お菓子が大好きな美少女。
ハイパー・ブロッサムに変身する。
武器はヨーヨー。
技名に毎回ちがうスィーツの名前が入る。
イメージカラーは赤、パーソナルマークは『ハート』で、変身時のエフェクトにもなっている。

豪徳寺宮子（ごうとくじ　みやこ）
オシャレが大好きなモテモテ天然お嬢様。
ローリング・バブルスに変身する。
武器はシャボンロッド。
タカアキという少年と両想い。
イメージカラーは青、パーソナルマークはシャボン玉を模した『○』で、変身時のエフェクトにもなっている。

松原薫（まつばらかおる）
男勝りな力持ち。
スカートが恥ずかしいらしく大嫌い。
スポーツも万能。
パワード・バターカップに変身する。
武器は大型ハンマー。
兄弟がいるせいか恋愛事には興味なし。
イメージカラーは緑、パーソナルマークは『☆』で、変身時のエフェクトにもなっている。

第０２話：最強コンビ出現！その名はフルーティアとグラフィティア！！

パワパフＺの前に現れた２人の少女。
彼女達は一体、何者なんだ！？
「『そうですわよ』って、もしかして・・・」
「オマエ達がコイツを倒したのかよ！？」
ももことかおるは変身を解いてから、２人に話しかけた。
「そうですわ。」
「弱っちすぎて、歯ごたえなかったけどな。」
「モンスターを倒してくれた事には感謝しますわ。だけど・・・あなた達は何者なんですの？敵ですか？味方ですか？」
みやこも変身を解き、２人に問いかける。
「率直なご質問ですわね。ですが、すぐには答えられませんわ！」
「ウチらが敵か味方かどうか、アンタら自身で確かめてみぃ！！」
「ハイパー・ブロッサム！」
「ローリング・バブルス！」
「パワード・バターカップ！」
「戦う愛のサイエンス・レジェンド！パワパフガールズＺ！！」
ももこ・みやこ・かおるの３人はパワパフガールズＺに変身した。
「ウフフ・・・変身しましたわね。では私達もいきますわよ、いろは！」
「オッケーや、はつね！」
「カラード・グラフィティア！」
「シンガー・フルーティア！」
「平和を守る最強コンビ！パワパフガールズＸ！！」
「な！？」
「何だとぉ！？」
ブロッサムとバターカップが驚くのも無理はない。
２人の少女はももこ達と全く同じデザインのコンパクトと指のリン

グを使い、パワパフガールズに変身したのだから。
「私達の他にもパワパフがいた・・・？」
バブルスも驚いている。
「そんなバカな！そんな事、あるワケないわ！」
「コイツらはオレ達のマネをしてるだけ！偽者だ！」
「ウフフ・・・言ってくれますわね！」
「偽者かどうか・・・確かめてみぃ！！」
「偽者なんかに負けねぇぜ！！」
「アホが！！」
バターカップとグラフィティアは組み合った。
「いくぞ！！」
「いくでぇ！！」
バターカップとグラフィティアの連続攻撃のし合い。
し合いの末、２人に同時に鉄拳が入った。
「ご・・・互角だ！力も・・・速さも！！」
「ハッ！ようやっと気づいたか！そやけど・・・これで終わりやと思たら、おおまちがいやで！！」
そう言うと、グラフィティアはどこからともなくスケッチブックを取り出した。
そのスケッチブックに、彼女は何かをサラサラと描いていく。
描き上がったその絵は、ハンマーだった。
その絵が実体化し、グラフィティアがそれを手に取る。
「イエローハンマー・ドライブ！！」
彼女はハンマーでバターカップを殴り飛ばした。
「ぐぁぁぁ！！」
飛ばされたバターカップを、ブロッサムが受け止める。
「バターカップ、大丈夫？」
「あ、ああ・・・」
「それにしても、何てパワーなの！？」
「私に任せてください！メタルバブル・シャンパーン！！」

バブルスが作り出したシャボン玉が、次々に硬質化していく。
「特訓の末にあみ出した新技ですわ！喰らいなさい！！」
鉄のシャボン玉が、グラフィティア目掛けて飛んでいく。
「いけますわ！！」
しかし・・・
「メヌエット・プロテクション！！」
グラフィティアの前に立ちはだかったフルーティアが作り出した緑のバリアーに、鉄のシャボン玉は弾かれた。
「え！？」
「ムダですわ。私のこのハープから作り出したバリアーは、あらゆる攻撃を跳ね返します！」
「さぁて、どないする？」
2人がそう言った、その時だった。
ユートニム博士とケン、そしてデジタル犬のピーチが走って来たのは・・・

第０３話：新たなパワパフ！はつねといろは！！（前書き）

キャラクター紹介２

羽根木初音（はねぎ　はつね）
福岡県からやって来た、みやこ以上に天然なお嬢様。
シンガー・フルーティアに変身し、音楽の力を操る。
武器はリコーダー＆ハープ。
成績優秀だが、決して奢り高ぶったりはしない優しい性格。
普段はおしとやかだが、激怒すると地元の福岡弁をしゃべる。
いろはとは大親友。
イメージカラーは桃、パーソナルマークは音楽を模した『♪』で、
変身時のエフェクトにもなっている。

梅丘色葉（うめがおかいろは）
大阪ＣＩＴＹから転校して来た、浪花っ娘（コ）。
カラード・グラフィティアに変身し、スケッチブックに描いた絵を
実体化させる力を持つ。
武器はペイントブラシ＆スケッチブック。
非常に元気いっぱいな女の子で、あらゆる武道の使い手。
『蹴る時にヒラヒラして足技を使いにくい』という理由からスカー
トをはく事を嫌う。
そのため変身時はオレンジ色のスパッツを着用している。
はつねとは大親友。
イメージカラーは黄、パーソナルマークは本を模した『□』で、変
身時のエフェクトにもなっている。

第０３話：新たなパワパフ！はつねといろは！！

パワパフＺの３人とパワパフＸの２人が対峙していると、そこにユートニム博士とケン、そしてピーチが走って来た。
「あー、やっぱり・・・」
『一足遅かったワン・・・』
「？？？」
ももこ達は全く事態が飲み込めない模様。
「お父さ・・・じゃなかった、博士。あまり事態が飲み込めていないようですが・・・」
「仕方ない、科学研究所に帰ってから説明するか・・・」

「え～！？この２人が新しい仲間～！！？」
科学研究所でユートニム博士とケンから説明をされたももこ達は驚いていた。
まぁ、驚くのも当然といえば当然なのだが・・・
「じゃあ、自己紹介をしてくれ、２人共。」
「はい、博士。」
赤色の髪でポニーテールにした少女が最初に自己紹介を始めた。
「私は羽根木（はねぎ）はつねですわ。シンガー・フルーティアに変身し、音楽系の技を得意としていますわ。」
緑色の髪でツインテールにした少女も自己紹介を始めた。
「ウチは梅丘（うめがおか）いろはや。カラード・グラフィティアに変身し、スケッチブックに描いた絵をペイントブラシで実体化させて戦う事が主な戦い方や。ちなみに、ウチはスカートが嫌いや。」
「おぉ、話のわかるヤツがいたか！オレもスカートが大嫌いなんだ！」

かおるがいろはに話しかける。
「言うとくけど、ウチがスカートを嫌いなんは、ただ単に足技を使いにくいからや。」
「いろはは合気道・空手・柔道・剣道、合わせて１０段の腕前なんですの。ちなみに私は弓道7段の腕前ですわ。」
「というワケで、これから先はこの2人と一緒に任務についてもらう。仲良くしてやってくれ。」
「はーい！」

数日後、はつねといろははももこ達3人が通っている中学校に転入した。

ももこ達3人は、段々2人と打ち解けてきた。
「へェ、はつねは福岡県出身なんだ？」
「そうですの。お父様の仕事の都合で1年前大阪ＣＩＴＹに引っ越す事になって、そこでいろはさんと出会ったんですのよ。」
「ウチらは楽しい中学校生活を送ってたんやけど、はつねが越して来てしばらく経った頃から、ＣＩＴＹにモンスターが出現するようになったんや。まぁそれも、黒幕がおるからなんやけどな。」
「その黒幕って、誰なんですの？」
「モジョ・ジュジュですわ。」
「モジョ・ジュジュ？」
「ケミカルＺの黒い光を浴びて変身した、モジョ・ジョジョの姉や。元々はモジョと姉弟猿で、動物園におったんやけどな。」
「じゃあ、モジョ・ジョジョはその後に変身したヤツだったってワケか。」
「ジュジュはＣＩＴＹを破壊し始めたんですの。私といろはさんはジュジュに襲われ、大ピンチになったんですの。」

「そん時、白い光をウチらは浴びたんや。白い光を浴びたウチらは、パワパフガールズXに変身できるようになったというワケや。」
「じゃあ、はつねといろはは私達の先輩なのかな？」
「それはわかりませんわ。大阪ＣＩＴＹの私達と東京ＣＩＴＹのあなた達がケミカルＺを浴びたのは、ほぼ同時期だったと思うんですの。」
「そうやったら、ウチらは同期っちゅうワケや。ま、これからよろしゅう頼むで！」
こうして、パワパフガールズは５人となった。
そして、パワパフガールズ達への新たな魔の手は、すぐそこまで迫っていたのである・・・

第０４話：モジョ達の逆襲！さらわれたブロッサム！！

東京ＣＩＴＹにある１軒の屋台で、悪役達がグチをこぼしていた。
ギャングリーンギャングの５人組とファジー・ラムキンスである。
「クッソー、パワパフのヤツら毎回毎回オレ達の邪魔をしやがって・・・」
「ケケケ・・・一度くらいメタメタにやっつけてやりたいよね～。」
リーダーのエースとリトル・アートロが一言こぼす。
「でも、ヤツらやたら強いッスからねぇ・・・」
スネークが一言言った。
「どうしたらいいんだよ、たく！」
「オマエ達、こんな所でグチこぼしてるのかモジョ？」
モジョ・ジョジョが屋台に入って来た。
「確かにパワパフＺは強い。だがそれは３人いるからだモジョ。」
「んじゃアンタは、１人に狙いを絞ればいいって言いたいワケか？」
「そうだモジョ。」
「だけど、バターカップって子はダメッスね。ミーのマッサージ攻撃が全く効かないし。」
「じゃあ、ブロッサムはどうだ？」
「そうだな、アイツだけならもしかしたら倒せるかも・・・」
「んじゃ、早速行動に移そうってなもんだ。」
モジョ達は笑い声を上げた。

そして、翌日。
学校では相も変わらず、みやこのゲタ箱にラブレターが大量に詰まっていた。
「うらやましすぎるよ、みやこ～！２・３通でいいから私に分けて

～！」
「いいですよ～♪」
ももこの懇願に笑顔で返事するみやこ。
「よかねぇよ！！みやこ宛てのラブレターをもらってどうするよ！！」
すかさずかおるの突っ込みが入る。
「かおるさんはラブレターもらわないんですの？」
はつねがかおるに質問した。
「たまに来るよ、女からだけどな。ったく、同性なんかにモテたってちっとも嬉しくねぇっつうの・・・」
「確かにかおるは同性にモテるって感じやもんな～。」
「いろは、それホメ言葉で言ってんのか・・・？」
「うんにゃ、かおる。ウチはバカにしとる。」
サラリと言ういろは。
「いろはぁ～！！許さねぇ～！！」
かおるはいろはを追いかけ回し始めた。
「捕まえられるもんなら捕まえてみぃ～♪」
「上等だ～！待ちやがれコラ～！！」
「2人共元気ですわね～。」
「あ～あ、私もみやこみたいにラブレター欲しいよぉ・・・」
そう言ってももこがゲタ箱を開けると、1通の手紙が落ちてきた。
「何これ。『今日の夕方5時30分、東京パークで待ってます。』って・・・これ、ひょっとして・・・」
「ラブレターですわよ、ももこさん！」
「ウソだろ～！？」
喜ぶみやこと驚くかおる。
「あぁ、私にもやっと春が・・・ってか、5時30分ってもうすぐじゃん！私行ってくる！！」
「ちょっと待てももこ！いくら何でも怪しすぎねぇか？」
かおるがそう言った時には、既にももこはいなかった。

「あ、あれ？」
「ももこさんなら、走って行っちゃいましたわよ。」
「行くの速っ！！」
「とりあえず、ウチらは研究所で待ってようや。」
かおる達４人は、科学研究所へと向かった。

ももこは東京パークにやって来ていた。
「どこかな、ラブレターの送り主～。」
「ここだよ。」
ももこは振り向いた。
「ちょっと顔貸してもらうぜ、赤堤ももこ！！」
「ギャ、ギャングリーンギャングのエース！！」
「ケケケ、ボク達もいるのだぁ～！」
ももこはギャングリーンギャングの5人組と、ファジー・ラムキンスに囲まれた。
「よくも私をだましたわね！許さないんだから～！！」
ももこは叫ぶと、ハイパー・ブロッサムに変身した。
「キャラメルシュート！！」
ブロッサムはリトル・アートロ目掛けてヨーヨーで攻撃する。
しかし、リトル・アートロが素早いので攻撃が追いつかない。
「でーいっ！！」
ビッグ・ビリーとファジー・ラムキンスが、巨大な岩を投げてきた。
「わぁっ！！」
間一髪でかわすブロッサム。
しかし、移動したブロッサムの背後にスネークが回り込んでいた。
「あ！」
「スネーク特製マッサージ攻撃ッス！」
スネークのマッサージがブロッサムを襲った。

「アハハハハ、力が抜ける～・・・」
「今ッス、グラバー！」
「あう！！」
カウボーイに変身したグラバーが、ブロッサム目掛けて投げ縄を投げてきた。
「キャアアアア！！」
ブロッサムは避けられずに、縄をかけられる。
「仕上げだぜ！」
グラバーと交代したエースがブロッサムの周りを回り、彼女をグルグル巻きにした。
「捕まえたぜ！」
「うぅ～っ！！こんな縄、簡単に解いて・・・」
そう言った時、突然ブロッサムの変身が解けてももこは元の姿に戻ってしまった。
「ウソ、どうして！？」
「グラバーが使った縄にはな、ケミカルZによって変身した者を元に戻す効果があるのさ！」
「そ、そんなぁ・・・」
「とりあえず、変身ベルトは取り上げさせてもらうぜ。」
そう言って、エースはももこから変身ベルトを奪い取った。
「あっ・・・」
「さてと、コイツをモジョのアジトに運ぶとするか。」
グラバーが変身した布袋に、ビッグ・ビリーが縛られたももこを放り込む。
「さて、行くか。」
エース達は高笑いしながら、ももこを連れ去って行った。
ももこの変身ベルトと、1通の手紙を砂場に埋めて。
「（た、助けて・・・みやこ、かおる・・・！！）」

その頃かおるとみやこは、モジョ・ジョジョと対峙していた。
「おかしいですわ。いつまで経ってもブロッサムが来ないなんて！！」
「アイツ、どこで何をやってやがるんだ？」
「いつまで経ってもブロッサムは来ないモジョよ。」
「え！？」
「どういう事だよ、それ！？」
「東京パークに行ってみな。」
そう言うと、モジョは逃げて行った。
「東京パークって、ももこさんが行った場所ですよね？」
「行ってみるか。」

東京パークに着いたみやことかおるは、辺りを歩き回った。
「あ！あそこで何か光ってますわ！」
「何だろ？」
かおるは砂場から何かを取り出した。
「これ、ももこの変身ベルトじゃねぇか！」
「手紙がありますわ。」
かおるは手紙を読んでみた。
『ハイパー・ブロッサムはオレ達が預かったぜ。
返して欲しけりゃ、モジョ・ジョジョのアジトまで来な。
ギャングリーンギャングリーダー　エース』
読み終えた2人は、顔が真っ青になった。
「ウ、ウソだろ・・・！？」
「ももこさんが、誘拐された・・・！！」

第０５話：美少女コンビ！いろはとはつね！！

ギャングリーンギャング達によって連れ去られたももこは、モジョ・ジョジョのアジトへと連れて来られた。
ももこは手足を縄で縛られた状態で、柱に縛りつけられている。
「ちょっと、アンタ達！この縄ほどきなさいよぉ！！」
ももこはジタバタともがいた。
「うるせーヤツだな。」
エースはそう言うと、ももこの口にガムテープを貼った。
「あ・・・ん～！！」
ももこは必死に叫んだが、ガムテープのせいでん～ん～としか声が出ない。
「ん～っ、むぅ～っ！！」
「やっと静かになったな。」
「そうッスね。」
「んじゃ、科学研究所に脅迫状でも送るか。」
リトル・アートロがももこにビデオカメラを向け、スネークがパソコンを起動させた。

「何だって！ブロッサムが誘拐された！？」
「ああ、間違いねぇよ！」
「砂場にベルトが落ちていましたし、手紙もありましたわ・・・」
みやこが言ったと同時に、研究所のコンピュータにメールが送られて来た。
「博士、このメール備え付けがしてあります。どうやら動画のようですね。」
「開いてくれ、ケン。」

「はい。」
ケンが備え付けファイルを開くと、そこにはももこの姿が映った動画が出た。
「ももこ！！」
「縛られていますわ・・・！！」
その回りに、ギャングリーンギャング達がいる。
「ヘッヘッヘッ、科学研究所の皆さん、ご無沙汰だな。ギャングリーンギャングだぜ！ハイパー・ブロッサムはオレ達が預かったぜ。」
「うぅ・・・バブルス、バターカップ・・・」
「コイツを助けたけりゃ、バブルスとバターカップ2人だけでここに来な。」
「ダメよ！バブルス、バターカップ！！これは罠よ！来ちゃダメ～！！」
「うるせぇ！！」
エースがももこの口をガムテープで塞いだ。
「ん～っ！！」
備え付けファイルの動画は終わった。
「どうします、かおるさん？」
「罠だろうが何だろうが、ももこはオレ達の仲間なんだ。放っとけるかよ！」
「そう言うと思いましたわ。」
みやことかおるはバブルスとバターカップに変身すると、研究所を飛び出した。

バブルスとバターカップは、モジョ・ジョジョのアジトに着いた。
「ブロッサム～！」
「どこだ～！？」
「あそこにいるぜ。」

2人が振り向くと、ギャングリーンギャング達とファジー・ラムキンス、そしてモジョ・ジョジョが後ろに立っていた。
エースが指さした方を2人が見ると、ももこが柱に縛りつけられていた。
「むぅ～っ、むぅ～っ・・・」
ももこは必死にもがいている。
「ブロッサム、今助けますわ！バブル・シャンパー・・・」
「おっと、下手な行動は止めな。」
「ちょっとでも動けば、ブロッサムがどうなっても知らないッスよ？」
「ひ、卑怯者！！」
「ケケケ、卑怯で結構～！」
「さぁ、オマエ達もおとなしくしなモジョ。」
「ク、クッソ～！！」
「し、しかたありませんわ・・・」

3分後、みやことかおるも変身ベルトを取り上げられ、ももこと同様に柱に縛りつけられてしまった。
口もガムテープで塞がれている。
「ん～、ん～！！」
3人はジタバタともがいた。
「パワパフガールズZも、こうなっちゃおしまいッスね～！」
「さ～て、今までの恨みを晴らすとするかなモジョ。」
そう言うと、モジョは巨大なカエル型のロボットを出し、エース達と共にそれに乗り込んだ。
「オマエ達をこのロボットのエサにしてやるモジョ～！」
舌をチロチロさせるカエル型ロボット。
「ん～っ、ん～っ！！（ヤ、ヤダ～！！だ、誰か助けて～！！）」

「これでパワパフガールズZもおしまいモジョ～！！」
「それはどうかしら？」
「な、何だ！？」
モジョ達が振り向くと、そこにはいろはとはつねが立っていた。
「オマエ達、何者だモジョ！？」
いろはとはつねは変身した。
「シンガー・フルーティア！！」
「カラード・グラフィティア！！」
「戦う愛の美少女（ビューティー）コンビ！パワパフガールズX！！」
「あ、新たなパワパフだと～！？」
「やっちまえモジョ！！」
カエル型ロボットは2人に向かって来た。
「甘いですわ！メヌエット・コブラ！！」
フルーティアがハープを弾くと、超巨大なコブラが目の前に現れた。
「モ、モジョ～・・・」
カエル型ロボットは動かなくなった。
「ヘビに見込まれたカエルやな！さて、トドメ刺すで～！」
グラフィティアがスケッチブックにバットを描き、実体化させた。
「大きくなれ！！」
バットが巨大化した。
「フンヌヌヌヌヌ～！！宇宙の果てまで飛んでけ～っ！！」
グラフィティアが飛び込みながらバットをひと振りし、カエル型ロボットをかっ飛ばした。
「どわ～っ！！」
「モジョ～！！」
モジョ達は天井を突き破り、空高く飛んでいった。
「一件落着ですわ。」
「そやな。」
いろはとはつねは元に戻り、ももこ達を解放した。

第０６話：バターカップの恋！？その１

ももことみやこは、今日も科学研究所に遊びに来ていた。
「こんにちは～、博士～！ケン～！」
「こんにちは。」
「かおるさんは来てないんですの？」
「そういや、今日はちょっと来るのが遅れるって言うてたなぁ・・・」
いろはがそんな事を言っていると、話の対象になっているかおるがやって来た。
「よぉ！」
「遅かったわね。」
「ああ。あ、そうだ！来ていきなりで悪いんだけどさ、オレもう帰るわ。」
「え、何でですの？」
「どこか行くの？」
「へへへッ・・・ちょっくらデートにな♪じゃあ、そゆ事で・・・」
かおるは帰って行った。
「デ・・・デートォ！？」
ももことみやこといろはは、一斉に驚いた。
「かおるって、彼氏おったんか？」
「イヤ・・・私もみやこも初耳だし・・・ねぇ、みやこ？」
「かおるさんがデート・・・ついにかおるさんも恋する乙女の悩みをかかえるのですね～！」
「み、みやこ・・・？」
「アカン、聞いとらへんわ・・・」
その時、はつねが入って来た。
「あら、皆さんおそろいで・・・」
「はつね・・・おフロに入ってたの？」

ももこの指摘通り、はつねからはシャンプーの香りがしていた。
「ええ。ところでどうしたんですの？」
「かおるがデートやいうて帰ったから、みんなでその事について話しとったんや。」
「別に不思議じゃないでしょ？かおるさんだって年頃の女の子ですし・・・」
「かおるが恋愛事であんな笑顔になった事なんてないよ？」
「これは気になりますわね・・・」
そんな話をしていると、ケンがモニターを見て言った。
「皆さん、モンスターが現れました！場所は東京パークです！」
「え～！こんな時に～？」
「とりあえず行きましょうか。」
ももこ達はパワパフに変身すると、現場へと向かった。

「着きましたわね。」
「それにしても、モンスターはどこよ？」
「あそこみたいや。」
いろはが公園のベンチを指差す。
「あら？あそこで一緒にいる人って・・・」
「かおる！？」
そう、なんとモンスターの横にかおるがいたのだ。
しかも・・・
「か、かおるの格好がいつもとちがう・・・」
「スゴくめかし込んでますわね。」
かおるの格好は、いつもなら絶対に着ないワンピース姿だったのだ。
「かおるはスカートが嫌いなのに、ワンピース着てるなんて・・・」
「よっぽど嬉しいんですのね、デートが。」
その時、コンパクトが光った。

「皆さん、別の場所にもモンスターが現れました！」
「え～！」
「しゃあないなぁ・・・」
ももこ達は、別の場所へと飛んだ。

「悪いッスね、バターカップ。ミーなんかにつき合ってもらって。」
「イ、イヤ、オレもヒマだったしよ・・・そ、それよりスネーク、今日のオレの格好の事だけど・・・どう思う？」
「とても似合ってるッスよ。」
「サ、サンキュ・・・」
かおるは顔が赤くなった。
「実はミー、そろそろギャングリーンギャングを辞めようかと思ってるんッスよ。」
「え、何で？」
「こうやってバターカップに優しくしてもらって、マッサージの事をホメられて・・・ミー、嬉しいんッスよ。だからもうそろそろ足を洗おうと思ってるんッス。それに、黒いオーラの力も段々と弱まってきてるんッスよ。」
「じゃあ、近い内に元に戻した方がいいな。それに、いずれブロッサム達にもオレ達の関係がバレるだろうし・・・」
「そうッスね。じゃ、ミーはそろそろ帰るッス。」
「おぉ！またな。」
スネークは帰って行った。

「フゥ・・・」
ザッ！

「ん？」
「お疲れのトコ申し訳ないんだがな・・・ちーっと顔貸してくれるか？」
「オマエはエース！！」
「仲間達もいるぜ！！」
「ヘッ、オレを倒せるとでも思ってるのか？」
「ああ、今回は自信あるぜ。」
「おもしれぇ！かかって来な！！」
エース達はかかって来た。
「バワード・バターカップ！！」
かおるはバターカップに変身し、攻撃をかわした。
「でぃっ！！」
「何！？」
なんと、ビッグが超巨大な岩石を持ち上げ、投げてきたのだ。
「わわっ！！」
バターカップは何とか避けるが、リトルの素早い攻撃で転ばされる。
「うわっ！！」
そこにすかさず、エースのカード連続投げが来た。
「う、うわあああ～っ！！」
バターカップは攻撃をもろに喰らってしまった。
バターカップは倒れ込んだ。
「どうなってんだ！？」
「へへへ、オレ達はグレート・ギャングリーンギャングにパワーアップしたのさ。モジョ・ジュジュ様の特訓でな！」
「何ぃ！？」
「それだけじゃねぇ。オレ達には新しい仲間もいるんだ！紹介するぜ。」
エースが言うと、グラバーの後ろから少女が出て来た。
「コイツはクレア・スーっていってな。グレート・ギャングリーンギャングの新メンバーだぜ！」

「エース、後はアタシに任せて。」
そう言うと、クレアは目にも止まらぬ速さでバターカップの背後に回り込んだ。
「あ！」
「油断大敵よ・・・」
「しまっ・・・」
クレアはバターカップを押し倒す。
「うわ！！」
「クレア・スイートマッサージ！！」
クレアはバターカップをマッサージした。
「うぅ・・・力が出ねぇ・・・」
クレアは縄を取り出し、力が出なくなり動けなくなったバターカップを縛った。
「うぅっ！な、何で・・・？」
「クレアのマッサージはな、スネーク以上に威力があるんだよ。さすがのオマエも、これには耐えられなかっただろ？」
「そ、そんな・・・！！」
「さてと。」
クレアはバターカップを持ち上げた。
「な、何をするつもりだ！？」
「いただきまぁ～す♪」
「な・・・うわあああ～っ！！」
クレアは大きく口を開け、バターカップを口の中へと放り込んだ。
「出せ～っ！！出しやがれ～っ！！」
バターカップは足をジタバタさせて暴れる。
クレアはうっとうしいとばかりに、バターカップの足をくすぐった。
「ヒャアアアッ！？く、くすぐったい～っ！！」
バターカップは足を止めた。
その瞬間、クレアはバターカップの足を口の中へとグイグイ押し込んでいく。

そして、ゴクリとバターカップを飲み込んだ。
「フフッ、これでバターカップは捕まえたわね。」
「じゃあ、行くか。」
エース達は静かにその場を立ち去った・・・

第07話：バターカップの恋！？その2

「う・・・うぅ・・・ん・・・」
かおるはようやく目を覚ました。
「ここ・・・どこだ？そうか・・・オレ、ギャングリーンギャングの連中に囲まれて、クレアってヤツのマッサージで動けなくなって、その後ヤツに飲み込まれて・・・ハッ！！」
かおるは目を覚ますと、自分が薄暗い地下室のような場所に閉じ込められている事に気づいた。
彼女の体はロープで縛られ、ベッドの上に寝かされている。
「オレの変身コンパクトは・・・？あの台の上か・・・何とかあそこまで行けないかな・・・」
かおるは立ち上がろうとしたが、扉が開く音が聞こえたので立ち上がるのを止めた。
かおるがジッとしていると、エースとクレアが中に入って来た。
「起きてたか、バターカップ。」
「あら？エース。この子コンパクトを取りに行こうとしてたみたいよ。少しいる位置がズレてる。」
「当たり前だ！いつまでも捕まってるワケにはいかねぇんだよ！！」
かおるは叫んだ。
「どうやら、自分の立場がよくわかってないようですわねぇ・・・」
「クレア、やっちまえ。」
「ええ。」
クレアはかおるの背後に回り、かおるにマッサージをした。
「ヒャアアア！？く、くすぐったい・・・」
かおるが動けなくなった瞬間、クレアがかおるの両足を縄で縛った。
「逃げようとするからこうなるのですよ？パワード・バターカップさん？」
そう言って、クレアはエースと共に部屋を出て行った。

翌日、かおるが家に帰っていないと松原家から聞かされたももこは、みやこと一緒にかおるを捜していた。
はつねといろははそれぞれ別行動している。
「みやこ、スネークにかおるの行方聞いたら良いんじゃないの？」
「それもそうですわね、では行きましょう。」

しかし、ももことみやこがスネークを探し当てると、既にはつねが行方を聞いていた。
「あ、はつね！」
「はつねさん！」
「あら、ももこさんにみやこさん。かおるさんの行方についてならもうスネークさんに聞きましたわ。おそらく、エース達に捕まったのではないかと言ってましたわ。」
「エース達に！？」
「それで、その場所はどこなんですの？」
「以前自分が所属していた頃、根城にしていたアジトがあると言ってました。地図も借りてありますわ。」
「それじゃ、行きますか！」
ももこ達はコンパクトをかざすと、パワパフZに変身した。
「ハイパーッ・ブロッサムッ！！」
「ローリングゥ・バブルスー！！」
「シンガー・フルーティアァ！！」
ブロッサム達は飛び出して行った。

「着いたわ！ここよ！！」
「早くバターカップを助けましょう！」
ブロッサム達は中へと入った。
中にはエースが立っていた。
「おーっと、来るのがずいぶん早かったな。まぁどうせ、裏切り者のスネークに地図でも借りたんだろうが・・・」
「ご託は良いから、バターカップを出しなさい！！」
「いいだろ。オマエ達！！」
エースに言われて、ビッグ達も出て来た。
ビッグの腕には、縛られたバターカップが抱えられている。
「ブロッサム・・・バブルス・・・フルーティア・・・」
「バターカップは返してもらいますわよ！！」
フルーティアが叫んだ。
「そうはいくかよ。グラバー、リトル！ヤツらを捕まえろ！！」
「おーっ！！」
グラバーとリトルが向かって来た。
「させませんわよ！ボレロ・プロテクション！！」
フルーティアが奏でたハープから炎の盾が飛び出した。
「アヂヂヂ！！」
2人は飛び上がった。
「今ですわ！私が引きつけている間にバターカップを・・・」
「ナメてるねー・・・グラバー、変身だよ！」
「あう。」
グラバーはなんとバターカップに変身した。
「ええ！？そ、そんな・・・！！」

「食らえ！！アクアグラビトン・ドライブ！！」
グラバーのハンマーが、フルーティアの盾を破壊した。
「キャアアアアア！！」
フルーティアは吹っ飛ばされた。
「フルーティア！！」
「余所見をしてる余裕があるのかよ？」
エースがカードを次々と投げてくる。
「ここは私が！バブル・シャンパーン！！」
バブルスが泡を出して、カードを止めた。
「甘いぜ！！」
エースがそう言うと、突然カードからトゲが突き出し、泡を割った。
「ウソ・・・キャアアアアア！！」
トゲ付きカードの直撃を受けるバブルス。
「バブルス！！」
「背中がお留守ですわよ？」
「！！」
いつの間にかブロッサムの背後をとらえていたクレアが、ブロッサムにマッサージを仕掛けた。
「あぁ・・・力が抜ける・・・」
ブロッサムも倒れ込んでしまった。
「ブロッサム！バブルス！フルーティア！！」
バターカップは叫んだ。
「あっけなかったわね。」
クレアはそう言いながら、ブロッサム達を縛り上げた。

縛り上げられたブロッサム達を囲むように、エース達は立っている。

「やったぞ！ボク達ついにパワパフZに勝ったんだ！！」
「さすがのあなた達も、こうなると形無しですわねぇ・・・」
「うぅ・・・」
「リーダー、コイツらどうする？」
「そうだな。海にでも連れてって魚のエサにでもしちまうか？」
「イヤ～ッ！！！」
ブロッサム達は悲鳴を上げた。
「ハーハッハッハッ！！」
エースは高笑いした。
と、その時・・・
「アンタら、誰かの事忘れてへんかぁ・・・？」
「そ、その声・・・」
「このウチ、梅丘いろはを！！」
「クソッ！よく見たら5人そろってなかったぜ！まぁいい、テメェも捕まえりゃ済む話だぜ！！行けぇ、オマエらぁ！！」
「おーっ！！」
「ウチをあまりナメへん方がええよ・・・」
そういうと、いろははコンパクトを取り出し変身した。
「カラードォ・グラフィティアーッ！！」
「やっちまえーっ！！」
グラバーが変身したブロッサム、ビッグの怪力、リトルの俊足も、グラフィティアは難なくあしらっていく。
「ウチにこんなチャチな戦法が通じるか！」
「アタシを忘れてもらっては困りますわ！」
「！！」
グラフィティアの背後をとったクレアが、彼女にマッサージをした。
「くぅ・・・しまった・・・なーんてな。ウチにこんなものが、通用すると思てんのか・・・？」
「な、何！？こらクレア、ちゃんとマッサージしろ！！」
「で、でもエース・・・この子の腕、まるでダイヤモンドみたいに

固くて・・・全然ほぐれないの！！」
「な、何だとー！？仕方がねぇ、全員でやっちまえーっ！！」
エース達は一斉に飛びかかったが、グラフィティアは難なく5人を持ち上げた。
グラフィティアは5人を持ち上げたまま回転し、5人を吹き飛ばした。
「ぐはっ！！」
エース達が気絶する。
「アンタら、覚悟しぃや！グラフィティアドライブ！！5連発ーッ！！」
グラフィティアは強大なハンマーで、5人を殴り飛ばした。
「ぐわぁーっ！！」
「オーマイガーですわーっ！！」
「やっぱり脂っこい物食いたかったよーっ！！」
「イテェよイテェよーっ！！」
「あうあうぁーっ！！」
エース達は星になった。

その後、スネークは元の姿に戻り、かおるは正式にスネークとの交際をももこ達に発表したのだった。
かおるの未来に・・・
幸あれ♪

第０８話：いろはとはつねの最初の出会い！その１

ユートニウム博士の研究所に、ももこ達5人が集まっていた。
「そういえば、はつねといろはってどうやって仲良くなったの？」
「え？」
ももこの質問に、いろはとはつねはキョトンとした。
「そういえばそうですわね。」
「2人とも性格が真逆だもんな～。」
みやことかおるも口々に言う。
「気になってるんやったら、話したってもええで！な、はつね？」
「ええ、そうですわね。どこから話したものか。」
2人は考え込むと、ポンと手を叩いた。
「そや、ほなあの頃の話から話したろか！」
「そう、あれは私が大阪ジュニアハイスクールに転校して来た日の事でしたわ・・・」
いろはとはつねは、その頃の思い出をももこ達に話し始めた。
およそ1年前・・・

大阪ジュニアハイスクール
「本日転校して来ました、羽根木はつねですわ。よろしくお願いしますわ。」
はつねは頭を下げた。
「アンタ！」
緑色の髪の少女が声をかけた。
「何ですの、あなた？」

「ウチはこのクラスの委員長、梅丘いろはや。アンタもこのクラスに入ったからには、ここのルールに従ってもらうで！」
「何か堅苦しいですの、そういうの・・・」
「何やとコラ～！？」
初回から相性が悪いいろはとはつねであった。

「羽根木さん！ウチのクラスではアクセサリー類は着用禁止！」
「何で委員長のあなたが風紀を注意するんですの！」
「そやかてウチ、風紀委員もやってるもん。」
「何ですと～！！」
「正確に言うと代理やけどね。」
「いろは、面倒見がええから。」
「それ以前の問題ですの～！！」

「・・・とまぁ、こんな事があってな。」
「どう考えても仲悪いじゃん！」
「どうやったらこういう関係になるんだ？」
「焦らないでください。ここからが本題なんですから。」

放課後、いろはは美術室でデッサンしていた。
そこにはつねが入って来る。
「梅丘さん、部活ですの？」
「ああ。ウチ色々な運動部掛け持ちしとうからな。落ち着けるんこの部活だけなんよ。今日は他の部員もおらへんし。」

「そうなんですか。私も近々音楽の発表会があるので、フルートとハープの練習させてもらってよろしいですか？」
「ええで。」
いろははデッサンの続きを始めた。
「（絶対梅丘さんの弱点を見つけてやるですの！）」
はつねは別の目的で張り切っていた。
と、その時・・・
向こうから白い光2つ飛んで来た。
白い光は窓ガラスを突き破り、いろはとはつねに当たった。
ドンッ！！
「うわぁぁぁ！？」
「うきゃああ！？」
いろはとはつねは光に包まれると、とんでもない姿になった。
「シンガーッ・フルーティアァァ！！」
「カラードーッ・グラフィティアーッ！！」
はつねは桃色を意識した姿に、いろはは黄色を意識した姿に変身した。
「な、何やこれは～！？」
「何ですの、これは～！！」
はつねといろはは慌てた。
「うわ、ウチいつの間にスカートはいて・・・」
「梅丘さん、スカートがお嫌いなんですの？」
「勘違いすなや？ウチはただ単に足技を使いにくいからスカートはきたくないだけや！」
「あ、そうなんですか・・・」
「何にしても、ちょっとつき合ってもらうで羽根木さん！」
「はい？」
「心当たりがあるんや。こないな事しそうなヤツをな！」
「ハ、ハァ・・・」
いろはとはつねは、割れた窓から外に飛び出した。

これが、後に大阪ＣＩＴＹの平和を守っていく事になるシンガー・
フルーティアとカラード・グラフィティア誕生の瞬間であった・・・

第０９話：いろはとはつねの最初の出会い！その２

ネプツニウム研究所
「ネプツニウム博士～！！おるか～？」
いろはは研究所に飛び込んだ。
その後ろにはつねもいる。
「あら、いろはちゃんいらっしゃい。」
ネプツニウムと呼ばれた女性は、平然と答えた。
「『いらっしゃい』ちゃうわ！博士らやろ！こんな事したんは！！」
いろはは前回変身した格好で立っている。
「あらまぁ、ユートニウム博士が言ってたのはこの事だったのね。」
ネプツニウム博士は笑いながら言った。
「ユートニウム博士がって、どういうこっちゃ？」
「さっきユートニウム博士から電話があったんだけど、何でも息子さんが氷山を破壊するのにケミカルＺの光線を使ったらしくてね。氷山は破壊できたけど、反動で光が飛び散ったらしいのよ。」
「それがここまで飛んで来て、ウチらに当たったと？」
「まぁ、簡単に言えばそういう事ね。」
「簡単に言うなや！」
「そうですわ！私はお嬢様なんですよ！なのにこんなはしたない格好を・・・梅丘さんも何か言ってください！」
「ネプツニウム博士！」
「はい？」
「ウチにオレンジ色のスパッツ作って！今すぐ！！」
ズテッ！
はつねはコケた。
「そっちの話ですか・・・」
「おやすいご用よ。たぶん３０分もあれば作れると思うわ。それまでここで休んでて。」

そう言うと、ネプツニウム博士は奥の部屋へと歩いて行った。

３０分後、いろははネプツニウムが作ったスパッツをはいていた。
「さすが博士やわ！ウチのサイズにピッタリ合うとる！」
「そう？それは良かったわ。」
ネプツニウムはスパッツのデータを黄色のコンパクトにインプットすると、いろはに渡した。
「これが変身用コンパクトよ。何かあったら、これで変身できるからね。」
「了解！」
「こっちははつねちゃんの分。」
ネプツニウムははつねに桃色のコンパクトを渡した。
「恐れ入りますわ。」
「ほな、ウチちょっと散歩行って来るわ。」
いろはが研究所を出て行く。
「あ、私も行きますわ。」
はつねも後を追って行った。

「何でウチについてくんねん。」
いろはは文句を言っている。
「良いじゃないですか。話の流れから考えて私とあなたが仲間関係にあるのは必然。仲良くしましょうよ。」
「アンタ、何か目的があるやろ・・・」
「あら？バレました？」
そう談笑している2人の前に、謎の女が現れた。
「白い光が学校らしき方に飛んで行くのを見たから、手強い相手が

できるかと思いましたに・・・大した事なさそうねぇ。」
「何や、アンタは？」
「私はモジョ・ジュジュ。あなた方と同じくケミカルZの光を浴びた者よ。」
「何やと！？」
「ただし、私が浴びたのは白ではなく・・・黒の方だけどね！！」
そう言うと、女はローブを取り去った。
バサッ！！
その姿は、猿のようだった。
「さ、猿や・・・」
「でも、まるで人間みたいですわ！」
「これがケミカルZの効果よ！！」
そう言うと、ジュジュは飛び上がった。
ドンッ！
「レインスピア！！」
マントが槍状になり、いろは達に襲いかかった。
ドガガガガ！！
「うわぁぁぁ！！」
「キャアアア！！」
いろはとはつねは吹っ飛んだ。
「同じケミカルZを浴びた者同士でも、あなた方と私とでは格がちがうのよ！！さぁ、そろそろトドメを刺させてもらいましょう！！」
「ぐ・・・」
ジュジュがそう言ったその時、いろはとはつねのコンパクトが光り出した。
カァァァァ・・・
「な、何！？」
いろはとはつねはコンパクトをかざすと、変身した。
「シンガー・フルーティア！！」
「カラード・グラフィティア！！」

いろはとはつねは、地面に降りた。
「それが、あなた達の力・・・パワパフへの変身か。良いものを見せてもらったわ。あなた達との勝負は、日を改める事にしましょ。」
そう言うと、ジュジュは去って行った。
こうして、いろはとはつねはパワパフとなり、ジュジュの魔の手から大阪ＣＩＴＹを守る事になったのである。

第１０話：オバケ屋敷！みやこの恋路とモンスター！？

東京ジュニアスクール
いつも通り、授業を終えたももこ達。
「あ～、終わった終わった～。ねぇ、金時堂行こうよ！」
「良いな、それ！」
即答するかおる。
「たまには甘い物もええかもな。」
「私達も行きますわ。」
はつねといろはも応じる。
「みやこは？」
「私は遠慮しておきますわ。これから『アレ』なので。」
「そうかいな。」
「ならしょうがないね。」
ももことかおるはアッサリ言った。
「では、また明日。」
みやこは足早に走って行った。
「何なんや？みやこの言う『アレ』て・・・」
「あぁ、その事ね・・・実はみやこ、年上の彼氏がいるのよ・・・」
「何ぃ！？」
「みやこさん、彼氏いるんですの！？」
驚くはつねといろは。
「うん。タカアキって人。確かオバケ屋敷でデートするって言ってたっけ？」
「そうだったな。いっちょ冷やかしにでも行くかぁ？」
ももことかおるがそう言った時、コンパクトが光った。
『４人共聞こえるか？またモンスターが現れたらしい！！』
「場所はどこですの？」
『ＣＩＴＹパークのオバケ屋敷だ！』

『出動だワン、パワパフＺ２人とパワパフＸ２人！！』
「はいよ！！いくわよ！ハイパー・ブロッサム！！」
「パワードーッ・バターカップ！！」
「シンガーッ・フルーティアーッ！！」
「カラードーッ・グラフィティアーッ！！」
ももこ・かおる・はつね・いろはの４人は、パワパフＺとパワパフＸに変身した。
「戦う愛のサイエンス・レジェンド！パワパフガールズＺ＆Ｘ！！」
ももこ達は、現場に急行した。

「オバケ屋敷・・・って、モンスターじゃなくてオバケの間違いじゃねーの！！？オイーッ！！」
「でもキャーとかギャーとか言ってるじゃん！！」
「オバケ屋敷なんやから当たり前やろ？」
「あ、そっか。」
「周りは普通ですし・・・間違いみたいですわね～。」
「えー・・・」
ため息をつくももこ達。
そんな中、４人に気づいた１人の男の子が声をかけてきた。
「あ！君達はもしやパワパフＺ＆Ｘ！？」
「そうでーす！アタシ達有名人～♪」
「丁度良かった！助けてくれ！」
「何事ですの？やはりモンスターが！？」
「イヤ・・・オバケ役が足りなくなっちゃって・・・手伝って♪」
「ハァ？」
んで・・・

ヒュ～、ドロドロ～・・・
「・・・何で・・・モンスター退治に来たハズが・・・」
ももこ、幽霊。
「オバケになってるし・・・」
かおる、ノッペラボウ。
「何でウチらがこないな事・・・」
いろは、ドラキュラ。
「あら、３人共なかなかカワイイですわよ♪」
はつね、口裂け女。
はつねが一番ブキミ・・・？
「でもここ涼しくて快適♪」
「外で働いてるとかなり暑いしな。」
「今回は結構楽な仕事やね～・・・」
「そういえば、みやこさんとそのタカアキさんっていうのはどこに・・・」
すると・・・
ドドドドド・・・
オバケ役の皆さんが突然走って来た。
「ギャ～ッ！！」
「ギャ～！！？」
「オバケ役の皆さん！？」
「あ・・・あああっ、あっちに本物のオバケが！！！」
「え！？」
「許せない～・・・食べ物を・・・コンニャクを何だと思ってるのよっ！？」
プルリ～ン♪
コンニャクのモンスター・プルニャクミンが現れた。
「オデンでは愛されているのに・・・ここ、オバケ屋敷では嫌われる毎日よ・・・だったら、とことんイジワルしてやるわっ！！」

「モンスター！オバケに紛れてたんか！」
「覚悟しなさい！！」
ももこ達は仮装を解いた。
「や～よ、プル～ンッ！」
プルニャクミンは逃げた。
タッ！
「あ、待てや！！」
「どこ！？暗くてわかんない・・・」
ペトッ！
「コンニャク！？見つけた、ここだぁ！！」
ドカカカカカ！！
「・・・？わぁ！間違えた！！」
ももこは間違って、逃げ遅れたオバケ役の人を蹴っていた。
「何やってんねん！？」
「だってあの人、スゴくプルプルな肌してるんだもん～！！」
「バ～カね～。」
「お遊びはここまでよ！おとなしく捕まりなさい！！」
ももこはヨーヨーでプルニャクミンを強打した。
ゴッ！！
「アゥッ！！ア、アタイのプルプル肌に何て事・・・を？」
ダダッ！
「グラフィティアショットトーッ！！」
いろははゴルフクラブを出すと、プルニャクミンを強打した。
ドッ！！
「なーっ！！」
「私達も外へ！」
「あぁ！」
外に出るはつねといろは。
「ももこ！オレ達も外・・・に？」
「おまんじゅうーっ！！」

ももこはおまんじゅうを見つけたのか、食べようと飛びかかった。
「ブロッサム！落ちてる物を拾い食いは・・・」
「いただきまー・・・す？」
ももこがおまんじゅうだと思ったものは、ガイコツの頭部だった。
「キャ～ッ！！ガイコツーッ！！」
「グラフィティア、フルーティア！ブロッサムがガイコツ触っ・・・・て・・・」
２人は辺りを見回すが、いろはとはつねはどこにもいない。
「ちょ、ちょっと・・・」
「グラフィティアー？フルーティアー！？」
ザワッ・・・
「ギャ！？葉っぱ！？」
ガタガタ・・・
「ヒィッ！！何だ！？」
ヌ～ッ！
「ヒィィィィッ！！」
「だずげで～！！！」
実はオバケ屋敷が苦手なブロッサムとバターカップでした・・・
「え？」
その頃、いろはとはつねは無事プルニャクミンを捕まえていた。
ところで、みやことタカアキはというと・・・
数分前にオバケ屋敷から出て、その後のデートを満喫していましたとさ♪
次回はいよいよアイツらに仲間登場！！？

第11話：新たなラウディラフボーイズ！！

モジョ・ジョジョのアジト

森の奥深くにあるアジトで、モジョが何やら怪しげな事をやっていた。

モジョは、以前パワパフZによって倒されたラウディラフボーイズ達を蘇らせるため、研究を進めていたのである。

そして今、ようやく蘇らせる準備が整ったのである。

「待ってろモジョ、息子達よ・・・今蘇らせてやるモジョよ・・・」

モジョが巨大な鍋に材料を入れていく。

材料はモジョの毛、ケミカルZの黒い粉、ももこのリボンの破片、みやこのシャツの破片、かおるのジーパンの破片である。

ももこ達の私物の破片をどうやって手に入れたのかは謎だ。

「さぁ、今こそ蘇るモジョ・・・我が息子達よ！！」

そして最後に、以前の戦いで手に入れたブロッサム達3人の髪の毛を投げ込む。

ポチャン！

すると、鍋が爆発した。

ドカン！！

「ゲホゲホ・・・」

モジョは咳き込む。

煙が晴れると、そこにはラウディラフボーイズ達３人が立っていた。

「あ・・・ママ。」

「ボクちゃん達・・・」

「生き返ったのか・・・？」

「そうモジョ！このモジョ・ジョジョの科学力を駆使して蘇らせたモジョ！！」

「ヘェ、やるじゃん・・・ママ。」

「さて、早速だが命令だモジョ！パワパフＺの３人を倒し、ここに連れて来るモジョ！！」

「それなんだけどさ、ママ・・・」

「ボクちゃん達だけじゃ、キツいと思うんだよね・・・」

「以前、アイツらの女の子らしさに負けちまったしよ・・・」

「ウ～ム・・・困ったモジョねぇ・・・」

モジョは困っている。

すると、研究室のドアが開いた。

ギギギ・・・

「あら、ジョジョ！研究の成果が出たのね？」

「ジュジュ姉さん！」

「ママ、誰この人？」

「モジョの姉だモジョ。」

「フーン・・・」

「どうも。」

「あれ？後ろに誰かいるモジョ？」

「あぁ、この子達はアタシが大阪にいた頃生み出した子達よ。さ、挨拶しなさい。」

「私はブレインだ。よろしく。」

銀髪の少年が挨拶した。

「某はブライドでござる。以後、よしなに。」

茶髪の少年も頭を下げる。

「オレはブリック。」

「ボクちゃんはブーマー。」

「オイラはブッチだ。」

ブリック達3人も挨拶をした。

「母上から聞いておったが、なかなか強そうな風貌でござらぬか。のぅ、ブレイン？」

「そうだな。しかし今のままではパワパフ達には勝てん。そこでだ・・・」

ブレインは3つの武器をブリック達に差し出した。

「私がパワパフ3人の武器を参考に作ったオマエ達の武器だ。役に立つと思うぞ。」

「サンキュー。」

ブリック達は武器を受け取った。

「さて、訓練でもするか・・・」

ラウディ達5人は、アジトの訓練部屋へと向かった。

それから数週間後・・・

ももこ達5人は、学校で授業を受けていた。

いつものように、授業中に呼び出し音が鳴る。

ピリリリリ・・・

「先生、頭が捻挫!!」

「私はお腹が痙攣ですわ・・・」

「オレは腰が貧血!」

いつもと変わらぬ意味不明の仮病で、ももこ達は授業を抜け出した。

ちなみにいろはとはつねはマジメなので仮病は使わない。

普通に授業を受け続けた。

ブロッサム達が公園にやって来ると、ブリック達3人がいた。

「モンスター反応があるってケンが言うから来てみれば・・・」

「いつぞやのラウディラフボーイズさん達ではないですか。」
「今日は1人いねぇんだな。」
「言っておくが、ずっと前までのオレ達だと思うなよ！」
「後悔させてやる！！」
「大福シュート！！」
ブロッサムはヨーヨーを放つ。
「喰らえ！ブレイク・シュート！！」
ブリックはオレンジ色のヨーヨーで攻撃を受けた。
ガキン！
「え！？アタシと同じ武器！？」
ブロッサムはたじろぐ。
「下がれブロッサム！メガトン・ダンク！！」
バターカップはブリックめがけハンマーを振り下ろした。
ゴォッ！！
「バブル・シールド！！」

ブーマーが水色のロッドで巨大シャボンを放ち、攻撃を防いだ。

ボヨン！！

「何ぃ！？今度はバブルスと同じ武器だと！？」

「一体どういう事ですの！？」

バブルスとバターカップも驚いた。

「驚いたか？これはモジョ・ジュジュって人が連れて来たヤツから渡された、オレ達の新しい武器さ！！」

「何だって！？」

「フフッ、驚いているようだな。」

「！？」

突然の声にブロッサム達が振り向くと、そこにはブレインとブライドが立っていた。

「あなた達は誰ですの！？」

「某はブライド。以後よしなに。」

「私はブレイン。ラウディラフボーイズの作戦参謀だ。」

「ブレインに、ブライドですって！？」

「そうだ。とにかく、我々の任務を実行に移す。捕らえさせてもらうぞ、パワパフZ。」

ブレイン達4人はブロッサム達に近づいて来た。

ザッ、ザッ！

「近づかせません！バブル・ガン！！」

バブルスはシャボン玉を連発した。

パパパパパ！！

「貴公らは某らの力をナメすぎている・・・」

そう言うと、ブライドはスケッチブックに剣の絵を描き、実体化させた。

カキカキ・・・

ボンッ！

そして剣を掴むと、次々とシャボン玉を斬り裂いた。

「ムン！！」

ズバババババ！！

「ウソ・・・」

「終わりだ。スリーピング・メヌエット！！」

ブレインがハープを奏でる。

すると、ブロッサム達3人は目がトロンとなった。

「ふぁ・・・」

ブロッサム達は、地面に倒れ込んだ。

ドサッ！

「任務完了。ブリック、ヨーヨーで3人を縛れ。」

「了解。」

ブリックはヨーヨーを操り、ブロッサム達3人をまとめてグルグル巻きにした。

そしてブライドが実体化させた袋に3人を入れると、４人はその場を立ち去った。

一方別の場所では、グラフィティアとフルーティアがブッチと戦っていた。

「どうしたんや？さっきから防戦一方やないか？」

「それでは私達を倒せませんわよ？」

「これで良いのさ。オイラの目的はそろそろ果たせる・・・」

「何やと・・・？」

2人が立ち止まったその時、遠くからブレインが飛んで来た。

「オマエは・・・」

「ブレインですわね？」

「良く覚えているな。さすがに少し前に会っていれば記憶に新しいか。ブッチ、こちらの目的は達成した。速やかに帰還するぞ。」

「はい。」

「な、何なんや！？」

「あなた方の目的って！？」

「直にわかるさ。直に、な・・・」

そう言うと、ブレインはブッチを連れて去って行った。

第１２話：対決！ラウディラフボーイズ！！その１（前書き）

キャラ紹介３

ギャングリーンギャング：アニメ版パワパフガールズＺにおいて、ブロッサム達と何度か戦った事のある全身緑の集団。５人の出会いの経緯が不明、ケミカル素粒子光線で元に戻らないなど謎の多い集団である。この小説では途中でスネークがメンバーから抜け、クレアが新メンバーとして加入し、グレートギャングリーンギャングと名称を変えている。

エース：ギャングリーンギャング及び、グレートギャングリーンギャングのリーダー。モンスターになる前から素行が悪く、親にも『皮膚の色を染めてますます不良になっただけ』だと思われている。特技はカード投げ（ただしよく投げている途中でカード切れになる）。

ビッグ・ビリー：力が自慢の巨漢。パワーの面ではバターカップやグラフィティアに負けているが、ギャングリーンギャングのメンバー内では力が強い方。母に頭が上がらないらしく、それはモンスター化しても変わっていない。

リトル・アートロ：メンバー１の小柄で、足が速いのが自慢。兄弟が１０人もいるためか、影が薄く何番目かも覚えられていないほど（本人曰く３番目）。

スネーク：元メンバーで、マッサージが上手な事が特技。ゲーマーで、皮膚の色が変わったのもゲームのやりすぎのせいだと思われている。この小説ではバターカップと恋仲になり、チームを抜け元の素肌に戻った。

グラバー：メンバーの中でも異色の存在で、変身を特技としている（ただし肌の色は変わらない）。変身しないと話す事ができない。

クレア・スー：ギャングリーンギャングの新メンバー及び紅一点で、

エースが連れて来た女の子。バターカップですら動けなくなるほど威力が高いマッサージを特技とする（効かないのはグラフィティアのみ）。エースの事が好き。

第１２話：対決！ラウディラフボーイズ！！その１

「何やねん、ブレインのヤツ。来たと思たら急に帰りおって。」
「私達など眼中にないって感じでしたわね。それに、何かイヤな予感がしますわ。」
はつねといろははそう言いながら、研究所に戻った。

「何やて、ももこ達が戻って来てないやと！？」
「うん。」
「３人共応答なしだワン。」
「どうやら、イヤな予感は的中したようですわね・・・」
「どういう意味や、はつね？」
顔をしかめはつねの方を見るいろは。
「恐らくももこさん達は・・・ラウディ達に捕まったと考えられますわ。」
「な、何！？」
「ホンマか、それ！？」
ケン達がはつねの方を見る。
「ええ。あの時なぜブレインがサッサと帰ったのか、私なりに推測してみましたの。考えられる理由は、先にある任務が完了したから１度帰還しようと思ったからではないでしょうか？」
「つまりそのある任務いうんが、『先にももこ達３人を拉致する』事やったと・・・はつねはそう思たワケやな？」
「はいですの。」
「一理あるな。ブレインとブライドの考えそうな事や。大方戦力を

削ぐ気やったんやろ。」
「博士、ももこさん達の救出は私といろはに任せて下さい。」
「あぁ、任せるよ。」
「ほな、行くではつね！」
「はいですの！シンガーッ・フルーティアーッ！！」
「カラードーッ・グラフィティアーッ！！」
はつねといろはは、フルーティアとグラフィティアに変身する。
「行くですの！！」
「よっしゃあ！！」
フルーティアとグラフィティアは、飛び出して行った。

その頃ももこ達3人は、廃工場の中に監禁されていた。
3人共手足を縄で縛られている。
「3人は捕らえた。後は、フルーティアとグラフィティアの出方を伺うのみ。」
ブレインは不敵に笑う。
「アンタ達、調子に乗ってられるのも今の内よ！！」
ももこが叫んだ。
「ん？」
「はつねといろはは悔しいが、オレ達3人よりもずっと強い！！」
「2人が来たら、きっと後悔しますわよ！！」
かおるとみやこも叫ぶ。
「フッ、それは私とブライドが彼女達の事を知らなければの話だろう？」
「拙者らはこの東京に来る前に大阪で散々あの2人と戦うた。彼女らの強さなど、とうに知っておるでござる。」

「そ、そんな・・・」
ももこ達は顔が引きつった。
「ほな、どうやってウチらに勝てるんか見せてもらおうやないか。」
「！来たか。」
ガレージが開き、グラフィティアとフルーティアが入って来た。
「いろは！」
「はつねさん！」
「よくここがわかったな。大方ケミカルZの気配を感知したのであろうが。」
「わかってるじゃないですか。」
「ボコボコにされる覚悟はできとぅやろな？」
「フッ・・・」
「それは貴公らの方よ。」
パチン！
ブライドが指を鳴らすと、ブリック達3人がフルーティアとグラフィティアを取り囲んだ。
ザッ！
「やれ！！」
ブレインの声で、ブリック達はフルーティアとグラフィティアに襲いかかった。
「ブレイク・スピン！！」
ブリックがヨーヨーで攻撃する。
ヒュン！
「ナメとんのか・・・グラフィティアブレイク！！」
グラフィティアはハンマーで攻撃を受けた。
ガキン！
バカン！
ブリックのヨーヨーが砕ける。
「ビリビリ・バブル！！」
ブーマーは発電するシャボンを放った。

「遅いですの。ラプソディア・ボイス！！あ～あ～あ～♪」
フルーティアは強力な歌声で、シャボンを全て割った。
パリン、パリン！
「これならどうだ！ショック・ウェーブ！！」
ブッチがハンマーで衝撃波を放つ。
グォォォォォ・・・
「遅いなぁ。そんな調子やったら、ウチらに届くようになるんは１０００年後やな。」
「インビジボゥ・ノクターン！！」
フルーティアとグラフィティアの姿が消えた。
スゥゥゥゥゥ！
「あ、あれ？消えた？」
「３人共気をつけろ！！」
「真後ろでござる！！」
「へ・・・？」
ブリック達が振り向くと、グラフィティアがハンマーを持って後ろにいた。
「グラフィティア・スマッシュ！！」
グラフィティアはハンマーを振るい、ブリック達を壁に吹っ飛ばす。
ドガッ！！
ガガァン！！
ブリック達は気絶した。
「一丁上がり。」
「肩慣らしになりませんわ。」
「次は某らが貴公らの相手だ。」
「言っておくが、前までの私達だと思うなよ・・・」
グラフィティアとブライド、フルーティアとブレインがそれぞれ対峙した。

第１３話：対決！ラウディラフボーイズ！！その２（前書き）

キャラクター紹介４

ラウディラフボーイズ：アニメ版パワパフガールズＺに登場した、見た目は子供の集団。その正体はモジョ・ジョジョがパワパフガールズの毛などを材料に作り出した息子とも言える存在である。メンバーは現在５名おり、最初の３名はジョジョが、追加された２名は姉のジュジュが生み出した者である。

ブリック：ももこの私物などを元に生まれた、ラウディラフボーイズのリーダー格であるオレンジ髪の少年。性格が粗暴。いつも赤い帽子をかぶっている。

ブーマー：みやこの私物などを元に生まれた、黄髪の少年。性格はバカ殿。

ブッチ：かおるの私物などを元に生まれた、黒髪の少年。女々しい性格。

ブライド：いろはの私物などを元に生まれた、茶髪の少年。武士道に精通している。礼儀正しい。

ブレイン：はつねの私物などを元に生まれた、銀髪の少年。研究が趣味。他のメンバーより老けて見える。

第１３話：対決！ラウディラフボーイズ！！その２

フルーティアとグラフィティアは、ブレイン・ブライドの２人と対峙していた。
「ブライド、オマエはグラフィティアをやれ。フルーティアは私がやる。」
「承知。」
「グラフィティア、油断しないでくださいね。」
「当たり前や。グラフィティア・ウィング！！」
グラフィティアはスケッチブックに描いた翼を実体化させ、空中に飛んだ。
ドンッ！！
「空中からやったらそう簡単に攻撃できへんやろ！」
グラフィティアは翼をはためかせ、羽を飛ばす。
ドドドドド！！
「コシャクな！！」
ブライドは剣を振るい、羽を弾き始めた。
ドカカカカカ！
「グラフィティア、張り切ってますわね。それじゃ、私も。プレリュード・サンダー！！」
フルーティアは光の雷を撃った。
「グォッ！！」
ブレインは集中砲火を受ける。
ドドドドド！
「ブレイン！大丈夫でござるか！？」
ブライドはブレインの方を見る。
「私に構うな！オマエはグラフィティアだけに集中しろ！！」
「御意！！臨兵闘者皆陣列在前・・・ハァッ！！」
ブライドは剣を無数に地面から飛び出させ、グラフィティアを貫い

た。
ドスッ！！
「グ、グラフィティア・・・！！」
「どうした？相棒がやられて絶望的になったか？」
「そんなワケ・・・ないですの♪」
フルーティアは舌を出す。
「何！？」
「こ、これは・・・紙でできた傀儡でござる！それでは、本物はどこだ！？」
「ここや！！」
ブレインとブライドが見上げると、真上にグラフィティアがいた。
「アンタがブレインに気をとられとった一瞬のスキをつき、スケッチブックにウチの分身を描いたんや。」
「チェックメイト・・・ですわね♪」
「喰らえ！！」
グラフィティアは羽を乱射する。
ドドドドド！！
「グァァァァァ！！」
ブレインとブライドは攻撃をまともに喰らい、煙に包まれた。
「勝ちましたわね。」
「あぁ！さて、ももこ達を助けようか？」
フルーティアとグラフィティアは、ももこ達を助けようと近づいた。
「それはどうかな？」
「え？」
次の瞬間、フルーティアとグラフィティアを電撃が襲った。
バリバリバリバリ！！
「キャアアアアア！！これはブーマーの電撃！？」
「何でや！？ブリック達は倒したハズやのに！！」
「私達が何の対策もなしにオマエ達を呼び出したと思うのか？私も傀儡の研究をしていてね。私達５人分の分身をあらかじめ開発して

おいたのだよ・・・」
「そ、そんな・・・」
「ウチらの裏を・・・かいたんか・・・」
フルーティアとグラフィティアは地面に倒れ込んだ。
ドサッ！
「はつねー！！いろはー！！」
ももこ達は叫ぶ。
「ブリック、ブーマー、ブッチ！2人を縛り上げろ。」
ブレインの指示で、ブリック達3人がフルーティアとグラフィティアに襲いかかった。

ももこ達5人はまとめてロープでグルグル巻きに縛られ、天井から吊された。
「う～ん、う～ん！！」
ももこ達はもがく。
「フッ・・・パワパフZもこれで終わりだな。さて、どうしてやろうか・・・」
ブレインは不敵に笑う。
その時、突然どこかから声が聞こえてきた。
「そこまでよ、ラウディラフボーイズ！！」
「？誰だ！？」
ブレイン達が辺りを見回す。
すると、倉庫の窓が割れて1人の少女が入って来た。
バリン！
タンッ！
「何だ、オマエは？」
「闇夜に紛れ悪を斬る！アタシは紫のくノ一、シャドー・クリスティア！！」

少女の姿は、ももこ達と同じくパワパフZの格好だった。
ただし、忍び装束のようにマントがついているが。
「新たなパワパフか。ひとまず引き上げるぞ！」
ブレイン達は逃走した。
「あ、ありがとう。助けてくれて。」
「あなたも私達と同じくパワパフなんですのね？」
「オレ達の新しい仲間だな！」
解放されたももこ達は、クリスティアに近づく。
「何か勘違いしてない？」
「え？」
「どういう意味や？」
「アタシはアンタ達とつるむつもりはない。」
そう言うと、クリスティアはシュパッと消えた。
「何なの、彼女・・・？」
ももこ達5人は、しばらくその場に立ち尽くしていた。
新たなパワパフZ、シャドー・クリスティア。
彼女は一体何者なのか！？

第１４話：新たなパワパフ！クリスティアは1匹狼！？

ももこ達が教室に入ると、何やら教室が騒がしかった。
「何か教室が騒がしいね。」
「何があったんだ？」
「そういえば、今日転校生が来るって言ってましたよ！」
「席に着きなさい！」
先生が教室に入って来て、ももこ達は慌ただしく席に着いた。
「出席を取る前に転校生を紹介します。入って来て！」
ガラッ！
その人物は、紫色のポニーテールをした少女だった。
「あ、あの子の腰！アタシ達と同じコンパクトがある！！」
「じゃあ、アイツが・・・」
「６人目のパワパフ、シャドー・クリスティア・・・」
ももこ達はヒソヒソと話をした。
転校生は黒板に名前を書いた。
桜上水雪乃（さくらじょうすい ゆきの）
「桜上水ゆきのです。以後よろしく・・・」
「じゃあ、桜上水さんは赤堤さんの隣ね。」
「はい。」
ゆきのはスタスタ歩いて行くと、ももこの隣の席に座った。
ガタ・・・
「やっぱりあなた、アタシ達の仲間になりたいんじゃないの？」
「そうですよ、同じクラスに転入したんですし仲良くなりましょうよ！」
「だから勘違いしないでと言ってるでしょ？アタシがここに来たのは、あくまで親の転勤の都合・・・あなた達とつるむつもりは毛頭ないわ。」
そう言うと、ゆきのはカバンから教科書を取り出した。

「感じ悪いヤツやなぁ・・・」

音楽の時間
「それでは、各自好きな曲を練習してください！」
ゆきのは静かにリコーダーを取り出すと、吹き始めた。
♪～♪♪～♪♪♪
「なっ・・・私がまだ吹けない曲を楽譜も見ずに！？」
「羽根木さん、あなた音楽が得意なんだっけ？そこが知れるわね。」
「ムッカつく～！！」

体育の時間
ももこ達はドッジボールをやっていた。
ゆきのの入ったチームはももこのチームを圧倒し、残るはかおるだけだ。
「このオレがスピードで負けてる！？」
「その程度でアタシと張り合うとは・・・片腹痛いわ！！」
そう言うと、ゆきのはボールをかおるめがけて打ち出した。
ドン！！
「クッ・・・」
バシ！
かおるは両手でボールを止めたが、次の瞬間ボールが高速回転する。
ギュルルル・・・
「な、何だと！？」
ボールはそのまま、かおるを強打した。
ドゴォ！！
ドサッ！

「かおるさんが負けた・・・」
「あの子、運動神経も相当高いわ・・・」
そんな事を言っていると、コンパクトが光った。
ピピピ！
ももこ達はいつもの仮病で抜け出し、現場へと急ぐ。
ゆきのも静かに5人を追って行った。

ももこ達が変身して現場に着くと、そこにはブレインがいた。
「ブレイン！！」
「5人揃って来たか。その方が好都合・・・」
ブレインの後ろから、ゲル状のモンスターが現れる。
「コイツは私が開発したモンスター、ゲルブローバーだ。コイツと戦ってもらおう。」
「後悔しないでね！行くわよ、みんな！！キャンディ・スピン！！」
ビュン！
ブロッサムはヨーヨーでゲルブローバーを攻撃するが・・・
ボイン！
効かない。
「攻撃が効かない！？」
「そうか、コイツは流動体なんだ！だから直接攻撃が通じねぇんだ！！」
「そやったら、ウチが！出でよ、雷雲！」
グラフィティアはスケッチブックに雷雲を描くと、実体化させる。
「喰らえや、落雷！！」
グラフィティアは落雷をゲルブローバーに落とした。
バッシャアン！！
「おっしゃ！！」
グラフィティアは勝利を確信したが・・・

ゲルブローバーは平然としていた。
「んなアホな！？雷も効かんやなんて！！」
「それどころか、大きくなってますわ！！」
「当然だ。コイツは開発の際、電気を使って作ったからな。電気を食らえば、より大きくなる。」
「何やとぉ～！！」
「やれ、ゲルブローバー！」
ゲルブローバーは触手を伸ばし、ブロッサム達を絡め取った。
シュルルル！
「キャアアアアア！！」
「フッ、これでパワパフも終わりだ・・・」
「それはどうかしら？」
「？誰だ！！」
空からクリスティアが現れた。
「凍結一刀両断！！」
クリスティアは刀をゲルブローバーに振り下ろす。
ザン！！
ゲルブローバーは凍りつき、砕け散った。
ビキビキビキ・・・
バキィン！！
「チッ！」
ブレインは退散した。
「また助けられちゃったね。」
「あなた達、パワパフとしての自覚あるワケ？」
「あん？どういう意味だ？」
「その程度だと、東京ＣＩＴＹの平和を守るパワパフはアタシ１人で充分ね。」
クリスティアはそう言うと、飛んで行った。
クリスティアとは相容れないのか？
どうする、パワパフガールズＺ＆Ｘ！？

第１５話：ひとまず和解？まずは共闘から！（前書き）

キャラクター紹介５

桜上水雪乃（さくらじょうすゆきの）

三重県から転校してきた、紫色の髪をした女の子。

割と何でもこなせる子である。

シャドー・クリスティアに変身し、忍術で戦う。

当初ブロッサム達５人と共闘する気はなかったが、危機を救われたため一時的に共闘。

その後闇化したブロッサム達のために必死に戦うフルーティア達を見て、ついに共に戦う事を決意した。

その際『仲間が消えるのが怖かった』と言っているため、かつては仲間がいて戦死したのではないかと思われる。

忍者であるため、変身後の姿は忍装束をイメージした服を着ている

他、長いスカーフを首に巻いている。

武器は忍びの刀（日本刀と小太刀がある）や手裏剣等、忍者道具一式。

イメージカラーは紫、パーソナルマークは手裏剣をイメージさせる『◆』。

猿型のサポートロボ、イチゴを連れている。

イチゴ

ゆきののパートナーであり、猿型のサポートロボット。

アクアリウム博士に造られた。

性別は♀で、桃色の体をしている。

ゆきのの事を心配しており、時折彼女に助言もする。

ピーチやレモンとはサポート型ロボット同士仲良くしている。

第１５話：ひとまず和解？まずは共闘から！

ゲルブローバーを倒したゆきのは、帰路についていた。
「ゆきの、あまり悪態ついちゃダメよ。」
「イチゴ。」
ゆきのの背中から、猿型のロボットが顔を出す。
「彼女達は言わば先輩よ。もう少し愛想良くしても良いんじゃない？」
「そうは言っても、彼女達弱いんだもの。アタシ１人でも、東京ＣＩＴＹの平和は守ってみせる。」
「随分と余裕だな。」
「！？」
ゆきのとイチゴの前に、タカのモンスターが現れた。

研究所
ももこ達５人は、研究所に戻って来た。
「何なのあの娘！アタシ達の方が先輩なのに！」
「ちょっと強いからって何やねん、あの態度。」
「全くですの！」
「あらあら、みんなピリピリしちゃって。」
「ネプツニウム博士！？」
研究所には、いろはとはつねを送り出したネプツニウムがいた。
「なぜここに？」
「私とユートニウム博士の知り合いにアクアリウム博士がいてね、ここで新たなペット型サポートロボを作るって言うから手伝いに来

てたの。」
「そういえば、彼女もアクアリウム博士の発明だったなぁ。」
「彼女？」
「イチゴって言ってね、猿型のサポートロボなの。確か、紫の娘のサポートについてたハズよ。」
「紫の娘って・・・」
「ゆきのや！」
その時、ネプツニウムの携帯に電子メールがきた。
「あら、イチゴからだわ。え！ＳＯＳ！？」
「イチゴって子とゆきのさんに何かあったんでしょうか？」
「いけ好かねぇヤツだけど、助けに行くか！」
ももこ達はパワパフＺに変身すると、ネプツニウムがパソコンで割り出した場所に向かった。

ゆきのとイチゴは、崖下にいた。
２人は別々に柱に縛りつけられている。
「イチゴが気を失うなんて・・・コイツ、何者なの！？」
「哺乳類は昔から猛禽類が天敵！哺乳類は一方的に狩られる運命にあるのさ！」
タカ型モンスター・ダカールだ。
「さて、オマエの方はその手のヤツに売り飛ばすとするか。中学生の娘は結構高値がつくんでね・・・」
「な、何ですって！？」
「そうはさせないわよ！！」
「あん？」
崖の上に、ブロッサム達５人がいた。

「あなた達・・・」
「行くわよ、みんな！！」
ブロッサム達は、ダカールに突っ込んで行った。

数分後、ブロッサム達はみんなボロボロにされていた。
「カカカ、５人で挑めば勝てると思ったか？オレは猛禽類モンスター１の武道派なんだよ！」
「あなた達、止めなさい！アタシは別にあなた達に助けてもらわなくても良いのよ！」
「おい、オマエな・・・」
「せからしか！！」
「は、はつねさん？」
「ゴチャゴチャゴチャゴチャ、せからしいったい！！私らはただアンタと仲間になりたいだけ！それ以上でもそれ以下でもなか！！」
「意地張ってないで仲間になろうよ？」
「・・・仕方ないわね・・・」
ゆきのは仕込み刀で縄を斬ると、コンパクトを取り出した。
「シャドー・クリスティアーッ！！」
タンッ！
「行くわよぉ！！」

その後、ブロッサム達はものの数秒でダカールを倒した。
「今回は助かったわ。・・・ありがと。」
クリスティアはそう言うと、足早に去って行った。
少しは仲良くなれたかな？

第16話：パワパフガールズVSダークパワパフガールズ!?『1』

ももこ達は、研究所でくつろいでいた。
「フゥ～、落ち着く～！」
「みんな、随分とノンビリしてるね。」
「しょうがないじゃないですか、ケンさん。」
「ラウディラフボーイズが5人に増えてから、頻繁にオレ達を狙ってくるようになったからな。」
「特にブレインは、ジュジュが作った天才科学者ですの。」
「ヤツの科学力は強大や。最弱のアメーバボーイズでさえ、液体で強化できるくらいやからな！」
「そういえば、ゆきのさんはどうしました？」
「用事があるって、帰ったぜ。」
「あ～あ、せっかく仲良くなれたと思ったのに・・・」
「まぁまぁ、これから少しずつ仲良くなっていけば良いですの！」
「そやそや！」

その頃ゆきのは、マンションの屋上から町を見下ろしていた。
「・・・イヤな風だわ。」
「そうね、ゆきの。」
「何だかイヤな予感がするわ・・・」

モジョのアジト・地下実験室
「フフフ・・・ついに完成したぞ・・・」
ブレインは不敵な笑みを浮かべていた。

ももこ達が授業を受けていると、ケンから連絡が入った。
「皆さん、大変です！ブレインが公園に出現しました！」
「了解～。」
ももこ達3人はいつものように仮病を言い、教室から出て行く。
「はつね、ウチらも行くか？」
「大丈夫ですの、5人全員ならともかく今回はブレインだけ。今の彼女達なら楽にあしらえますわ。」
「・・・」

「ブレイン、またあなたなのね！」
「今度は何の用だよ？」
「フフフ、今回私は新薬の開発に成功してね・・・それの実験台になってもらおうというワケさ。」
「何の薬か知りませんが、私達を甘く見ない方が良いですよ！」
「みんな、行くよ！！」
ももこ達3人はパワパフガールズに変身する。
「来な。初めはノーガードでいてあげるよ。」
「ナメんじゃねぇぞ！スイングソニック！！」
バターカップはハンマーを叩きつけた。
ブンッ！！
だが、ブレインは片手でハンマーを受け止める。

ガシッ！
「なっ！？」
「その程度か？」
「バブル・シャンパーン！！」
バブルスは泡の玉を無数に放つ。
だが、ブレインは手に持った剣で泡を次々に叩き斬った。
ザンッ！！
「そんな・・・」
「ブライドの剣術を見様見真似でやってみたが、意外とできるものだね。」
「ストロベリー・パフェ！！」
ブロッサムはヨーヨーでブレインを拘束する。
ギュッ！！
「ほう、ヨーヨーか。だがこの程度で私の動きを封じれたと・・・思うなよ。」
そう言うと同時に、ブレインの右手から放たれた電撃がブロッサムを襲った。
バリバリッ！！
「キャアアア！！」
「ブロッサム！！」
「君達もだ。」
ブレインは左手からも電撃を放ち、バブルスとバターカップを気絶させる。
バリバリッ！！
「キャアアア！！」
「私は色々な実験をしていてね、自らの体内にある微弱な電流を増幅する実験も試みたのさ。その結果がこれだ。私にとって君達は３人がかりでもその程度だよ。」
ブレインはブロッサム達に近づいた・・・

第17話：パワパフガールズVSダークパワパフガールズ!?『2』

いろはとはつねはユートニウム研究所でももこ達の帰りを待っていたが、彼女達は帰って来ない。
「おかしいな・・・」
「いろは、心配ですわ。見に行きませんか？」
「そやな。」
いろはとはつねは研究所を出て、公園へと向かった。

「公園に着いたけど、ももこらはどこなんや・・・」
「あ、いましたわ！」
はつねといろはは3人に近づく。
すると、急に3人は変身した。
「ダークブロッサム!!」
「ダークバブルス!!」
「ダークバターカップ!!」
「こ、これは・・・」
「一体どういう事ですの!?」

その頃、ゆきのはイチゴと共にコンビニに来ていた。
「このジュース美味しいわ。」
「そうね。」
「・・・！ゆきの、何か闇の力を感じるわ!!」
「何かあったのかしら？」
ゆきのは闇の力を感じ、その場所に向かった。

「着いた・・・え！？」
公園に着いたゆきのが見たのは、いろはとはつねがももこ達3人と向かい合っている姿だった。
しかも、ももこ達は色が黒い。
「どういう事や、これは・・・」
「私の研究の成果だよ。」
ブレインがももこ達の前に現れた。
「ブレイン！！」
「彼女達に何をしたんですの！！」
「私の薬の実験台になってもらっただけさ。闇化の実験台にね。」
「闇化やと・・・」
「許さないですの！！」
「フフフ、良いねその表情・・・さぁ行け、ダークパワーパフガールズ！！」
「はい、ブレイン様。」
いろはとはつねはパワパフに変身し、ももこ達に向かって行った。
「ゆきの、あなたは行かないの？」
「アタシは・・・」
「シャドーヨーヨー！！」
ももこは黒いヨーヨーを伸ばしてきた。
ビュン！
「おっと！」
「シャドーシャンパーン！！」
みやこも泡のロッドで攻撃する。
「目ぇ覚ますんや、3人共！！」
「シャドーダンク！！」
かおるのハンマーに、いろはは吹っ飛ばされた。

ドスン！！
「うわぁ！！」
「いろは！！」
「余所見してる場合？」
「！！」
「シャドープリズナー！！」
ももこの放ったヨーヨーが、はつねを絡め取る。
ギュル！
「キャッ！！」
「フンッ！」
ももこははつねを投げ飛ばした。
「無様だな・・・そんな様で、よく3人を助けようと思ったものだ・・・」
「何とでも言い・・・」
「私達は諦めませんわ！！」
「そうか、なら一思いにやってやろう。」
ブレインはももこ達に指示をした。
ももこ達はゆっくりと近づいて行く。
「そこまでよ！！」
その声と同時に、ゆきのが降り立った。
タンッ！
「ゆきの！！」
「ゆきのさん！！」
「イチゴに言われて考えてみたの。アタシはどうしてあなた達と共に戦わないのか・・・きっとアタシは怖かったんだわ、仲間が消える事が・・・でも、もう迷わない！！アタシは、あなた達と共に戦う！！」
ゆきのはコンパクトを取り出した。
「チェンジ！パワーパフガールズ！！」
ゆきのは紫色の服に包まれる。

首にスカーフを巻き、小太刀と日本刀を装備した姿にゆきのは変わった。

「闇夜に潜む紫電の忍び・・・シャドー・クリスティア・・・推・参！！！」

反撃、開始だ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4504c/

来ましたっ！パワパフガールズ７！！

2011年8月29日02時37分発行